

「確かな学力の定着・向上をめざして」

～「楽しかった」「わかった」「力がついた」を実感できる授業づくり～

I 研究の内容

1 研究の具体的内容

(1) 授業の改善に関する取組

◎教師の指導力

- R-P-D-C-Aサイクルによる授業改善の推進
- 教師同士が専門家として育ち合う研究協議の構築
- きめの細かい指導の充実による学習意欲の向上
- 発達段階に応じた指導の工夫による基礎的・基本的な知識・技能の定着
- 知識・技能を活用する言語活動と、それを支え、育む言語環境の充実
- 学級経営の充実

◎学校の経営力

- 校務分掌の単純化
- 授業実践をもとにしたカリキュラムの蓄積
- 子どもの変化も、教師の変化もゆるやかに
- 定例会議の精選
- 「あれもこれも」から「これとこれ」

(2) 授業外の取組

◎家庭の教育力

- 家庭学習を必要とする授業づくり
- 家庭と学校が連携した教育的な手助け
- 適度な量と範囲による家庭学習の習慣化
- 家庭での支援的な対話への働きかけ

2 研究の柱となる方法

◎授業構想検討会・授業改善プラン検討会

- 実践の積み重ねが求められる一単元において、学問的根拠をもとに教師が納得いくまで教材をかみくだき、教材研究・教材分析をする。
- 単元の特性や教材の価値をとらえ、指導する内容を精選し、その単元で指導するねらいを明確にする。
- 単元のねらいを達成するために、児童の実態を把握し、適切な指導過程と指導方法を用いて、授業の組み立てを考える。
- 実践後は、授業改善プラン検討会において、授業実践のまとめや学力評価を行い、授業改善プランを作成する。

◎授業研究会

- イベント的な授業ではなく、日々の授業の一コマを公開する。
- 学力の実態把握及び診断を公開し、評価を受け、改善を行う。

◎事例研究会

- 地域の学校の教員と情報交換や本校の取り組みについて検討する機会として、事例研究会を実施する。

◎学級力向上プロジェクト

- 学級力の実態を把握し、学級づくりの成果と課題を分析する。
- 分析結果をもとに、「スマイルタイム」を通して学級改善を図る。

◎常任アドバイザー・県教育委員会指導主事による指導・助言・支援

- 常任アドバイザーより、「学校の経営力」や「家庭の教育力」等を含めた総合的な指導・助言をしていただく。
- 県教育委員会指導主事より、「教師の指導力」への支援をしていただく。

II 成果と課題

1 成果

◎授業構想検討会・授業改善プラン検討会

実践の積み重ねが求められる単元を選択し、授業実践のまとめや評価を行い、授業改善プランを作成する。次年度の教育課程の実施に生かせるよう、学習教材についてもデータ化を図る。

1年 国語「ちがいをかんがえてよう」 算数「ずをつかってかんがえよう」

2年 算数「九九をつくろう」

- 3年 国語「れいをあげて説明しよう」 理科「じしゃくにつけよう」
 4年 算数「わり算の筆算を考えよう」
 5年 国語「筆者の考えをとらえ、自分の考えを発表しよう」
 算数「平均・単位量あたりの大きさ」
 6年 算数「速さの表し方を考えよう」 理科「物の燃え方と空気」
 総合的な学習の時間「川倉の素晴らしさを伝えよう」

- はぐくみ1 算数「九九をつくろう」
 はぐくみ2 算数「わり算を考えよう」

◎授業研究会

授業研究会において、授業リフレクションを行い、さらに常任アドバイザー及び指導主事から指導助言をいただき、授業改善に生かせる研究会を行うことができた。

特に、5年算数「単位量あたりの大きさ」においては、事後研究を行い、授業力養成講座での授業公開で改善授業を行った。

◎学級力向上プロジェクト

学級力レーダーチャート（視覚的に表現された学級力アンケートの集計結果）をもとに、学級の仲間づくりの成果と課題について、友達と協力して診断し、改善策を話し合い、学級力が少しずつ高まる。

◎事例研究会

授業とリンクした家庭学習の取組及び学級力を育てる取組について、研究会を行い、共通理解、情報交換を行った。

◎調査及び検査結果の活用

学力・学習状況調査及びつまずき診断検査のデータの分析に基づき、学級や個人の具体的実態を把握し、指導の充実や学習状況の改善に役立てる。

2 課題

<改善プランの有効活用>

実践の積み重ねが求められる単元において、作成した改善プラン及び学習教材を有効活用し、学力向上への取組を継続させる。

<指導方法の改善・改善プランの作成>

指導方法の改善・改善プランの作成にあたり、授業実践のまとめ及び評価を行う際、教科学力の4つの観点にそって子どもの学力をバランスよくとらえることが必要である。

<習得と活用について>

活用学習を行うためにも、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させることが大切である。その際、形成的評価を行い、習得を確かなものにしていく必要がある。

<調査及び検査結果から>

「学力学習状況調査」「つまずき診断検査」の結果から、下記について特に課題が見られた。
 国語においては、「情報を読み取って書く」「条件を付した記述」
 算数においては、「示された情報の中から、適切なものを選択し、必要十分な論拠を示しながら説明したり書いたりする」

知識・技能の習得・定着とともに、活用学習（論理的に考え、言葉を使って論理的に表現する学習）を行うことが求められる。

<活用学習>

活用学習を進める際、時間をかけて丁寧に学習を進めることが大切である。そのため、教科間等の指導内容の接続・連携が求められる。また、活用学習をする時期と教科を選定するにあたり「重点化」することが必要である。

<学級経営の充実>

年度末2月に事例研究会を行い、学級力向上プロジェクトの取組について、中間的な見通しをもつことができた。しかし、実践途中で授業公開・研究会を行い、各自の実践を振り返り、充実させる必要がある。

<家庭へのはたらきかけ>

最も教育力の向上が一律に期待することが難しいと思われる家庭へのはたらきかけについて、授業とリンクした家庭学習の取組を継続するとともに、学力向上P S事業における学力向上の取組を保護者にも公開し、理解と協力を求める。

<学校の経営力>

「当たり前のことをしっかりやり抜くこと」の難しさを乗り越えながら、「大切な教育はバランスよくすべてやる」ための学校の経営力が求められる。

（研究主任 岩下秀人）